

## 第3章 佐世保市と三川内焼

### 1 佐世保市の位置と概要

佐世保市は、長崎県北部に位置し、県庁所在地の長崎市からは車で約1時間半の場所にあり、市の東部は佐賀県に接しています。周囲は国見山、烏帽子岳、弓張岳など200～700メートル級の山々に囲まれ、平坦部は少なく、西部から南部の海岸線は、複雑なりアス式海岸を形成しています。この地形を生かし、良好な港として「佐世保港」が形成されました。また、西側の沿海には、多くの島々からなる「九十九島」があります。このように、海と山の変化に富む自然景観のあるまちです。

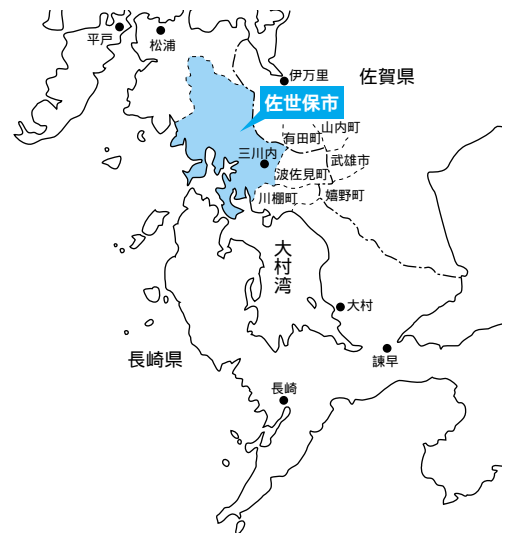
市の産業構造としては、かつては、造船業を中心とする第2次産業が市の基幹産業として盛んでしたが、折からのオイルショックや造船不況のあおりを受け、往時の勢いは薄れつつあります。現在では小売・サービス業を中心とする第3次産業が中心で商業都市的な色彩の濃いものとなっています。

観光施設としては、滞在型リゾート施設である「ハウステンボス」や西海国立公園「九十九島」などが有名です。最近の新たな観光スポットとしては、ハンバーガーの日本発祥の地として「佐世保バーガー」のお店が人気を博しています。

### 2 三川内焼について

三川内の窯業は、今から約400年前に平戸藩の御用窯として成立しました。そこでは、主に天皇家や将軍家、大名家といった権力者への献上品の製造が主な仕事とされていました。そのため、有田焼や波佐見焼のように産業としての色彩は薄く、繊細優美な絵付けや、精巧緻密な細工物に代表されるように技術の洗練化が使命となっていました。明治時代になってからは、そうした素晴らしい製品がヨーロッパに向けて数多く輸出され、世界各地の美術館において「古平戸」と称して所蔵されているそうです。現在にあっても、そうした技術を受け継ぐ窯元達の製品は目を見張るものが多く、たくさんの愛好家に利用されています。

三川内焼は、肥前地区の焼き物産地の中でもとりわけ小さな産地です。そのため認知度も高くはなく、どうしても肥前地区の焼き物の総称としても利用されることもある有田焼の名称を使って市場に出回ることが多かったようです。また、有田焼、波佐見焼、三川内焼と陶磁器産地が隣り合わせになっているという地理的な特性もあり、なかなかその区分は難しいものがあります。「唐子絵」に代表される呉須による絵付けや「透かし彫り」に代表される細工物、そして「卵殻手」とも言われる薄作りという他産地では決して真似ができない三川内焼の素晴らしさに触れていただき、400年もの間受け継がれてきた「世界にも通用する技術」を持ち合わせている産地として認知していただきたいと思います。

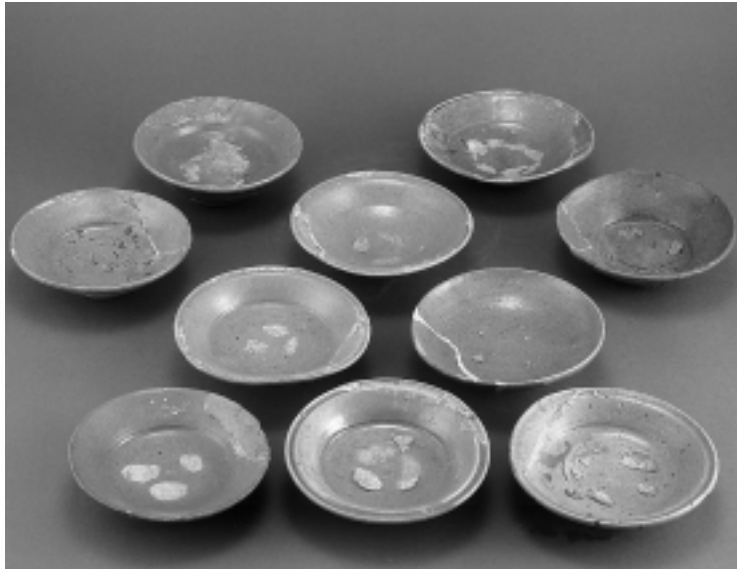


## 第4章 三川内焼の歴史

### 1 三川内焼は陶器に始まる

戦国末期の天正18年（1590）に豊臣秀吉は九州に次いで東北を平定し、天下を統一しました。諸大名を指揮下に治めることに成功した秀吉は、さらに文禄元年（1592）には唐入りと称して大陸へ侵攻します。朝鮮の役です。この秀吉の天下統一から朝鮮出兵という武家社会の再編成の時期は、また焼き物の画期でもありました。

文禄2年、朝鮮に在陣していた唐津岸岳城主の波多三河守は秀吉の勸気を受けて改易、転封されてしまいます。このとき、波多氏の保護にあつて朝鮮系陶器を焼いていた岸岳諸窯の陶工も離散する事件となりました。世に言う「岸岳崩れ」です。



葎の本窯灰釉陶器

離散した陶工は肥前各地で窯を開き、陶器を焼き始めます。これらの窯は伊万里椎の峰、西有田、有田、波佐見でほぼ一斉に始まり、佐世保地方でも三川内の木原葎の本窯や柳の本窯、新行江の牛石窯が開かれました。佐世保地方で初めての窯業が起こったのであり、それは陶器として始まりました。

従って、これらの窯では唐津系陶器が焼かれました。葎の本窯でも、木灰を釉薬とした陶器の皿、茶碗、鉢、そして片口やすり鉢などの雑器を主体としながら、わずかに茶器も造っています。

慶長3年（1598）に秀吉は死去、それを契機に諸大名は朝鮮から撤退します。その際、多くの朝鮮の技術者を連れ帰りました。自国の殖産興業のためです。

朝鮮は高麗時代より焼き物の先進地であり、日本国内で白い磁器はまだ焼く技術がなく、もっぱら輸入にたよっていた時期でありましたので、西国の諸大名は新しい時代の焼き物の到来を見越して、陶工も加えたのです。

平戸の松浦鎮信が連れ帰ったのは、釜山に近い熊川こまかいの巨関こせきや高麗媪です。平戸に来た朝鮮陶工は平戸島の中野に窯を開きました。

中野窯は陶器ではなく磁器を焼いていますが、1630年頃まで三川内では依然として陶器が焼かれていました。



葎の本窯跡

朝鮮の役は膨大な人命と財産を消耗しましたが、一方では新しい焼き物文化を定着させることにもなりました。まさに、秀吉の天下統一から朝鮮の役は三川内を含む肥前さらには日本の焼き物の画期を演出しました。

## 2 陶器から磁器への転換

肥前磁器の発祥地は有田です。朝鮮陶工の李三平により、1610年頃には有田天狗谷で磁器の生産が始まっていました。一方の三川内では依然として陶器が焼かれていましたが、時代の流れは磁器に有利でした。それは、食器として土物の陶器は、清潔感あふれる白い磁器とは勝負にならなかったのです。

1630年頃に始まる窯のなかで、最初は陶器を焼き、後半になって磁器に転換する窯があります。木原地蔵平窯と三川内長葉山窯です。これらの窯では、有田が磁器で隆盛を迎えるなかで、技術革新を求め、1640年頃ようやく磁器に転換できました。

有田より30年近く遅れるのは、技術の秘匿により有田から情報が出なかったこと、さらに自前で原料となる白磁鉱を確保できなかったことにあります。

巨関の子の今村三之丞が、寛永10年（1633）に針尾三ツ岳で網代石と称する白磁鉱を発見し、さらに寛永14年（1637）に佐賀藩が朝鮮陶工保護のため、有田の日本人陶工を追放する事件が起こります。結果として、その技術が三川内に入り、原料も確保できていたことから、1640年前後に三川内では磁器に転換できました。

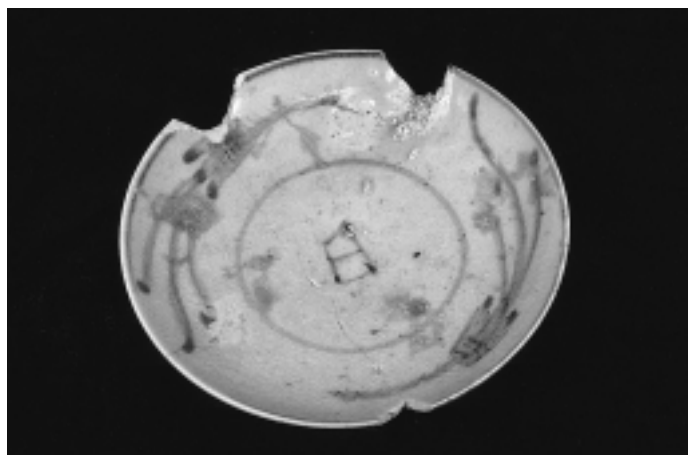


長葉山窯跡



長葉山窯跡  
藁灰釉陶器  
茶碗

長葉山窯跡  
磁器に転換直後の磁器  
日宇鳳凰文皿



### 3 民窯と藩（官）窯

松浦鎮信は朝鮮陶工に磁器を焼かせるため、最初は平戸島中野に窯を開かせ、三川内で陶器から磁器に転換する時期に合わせ、今村三之丞を平戸藩御用窯棟梁に任じ、長葉山窯に最初の藩窯を置きました。そして御用窯が軌道に乗り出す慶安3年（1650）には中野の陶工の三川内移転はほぼ終了することになります。

最初の御用窯となった長葉山窯は、巨関と一緒に来日した高麗媼（日本名 中里エイ）が元和8年（1622）が開いた窯です。つまり、三之丞は同じ朝鮮陶工というよしみを通じて長葉山に藩窯を置いたのです。また、陶器から磁器に転換が終わり、御用窯として十分に機能できる技術や環境が整備されていたことも大きいことです。

最初の御用窯は民窯と同居する形となりましたが、寛文7年（1677）に三之丞の子、つまり第2代の棟梁となる弥治兵衛は三川内皿山に新たに細工所を新築して移転します。

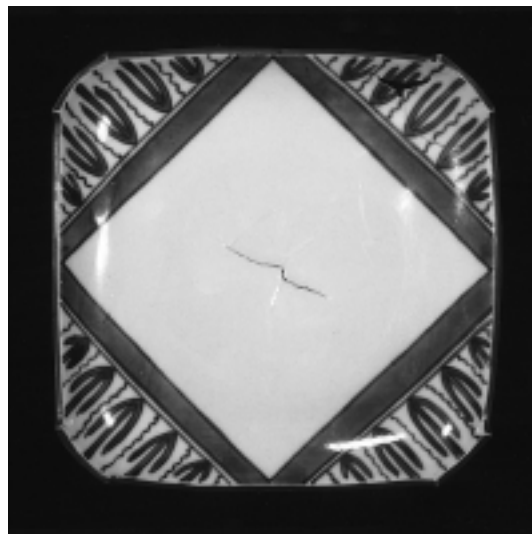
新たに御用窯となったのは、三川内東窯です。この窯も、民窯の寄り合い（共同窯）であり、その一部分を藩窯としたのです。三川内では、伝統的に民窯を間借りする形となりましたが、実は窯の運営は藩が行い、民窯の各窯元は藩窯を使わせてもらっていたのが真相のようです。

御用窯の藩窯は17世紀後半は三川内東窯、18世紀になると三川内西窯に固定され、明治を迎えるまで三川内から移転することはありませんでした。

藩は三川内地区の三川内、江永、木原を三皿山に定め、江永、木原に番所を配置し、三川内には代官所を置いて窯業全体の管理を行っています。民窯では専ら日用雑器が焼かれ、主に関西方面へ供給されています。

御用窯では、藩直営ということもあり、採算を度外視して高級品が焼かれました。藩が使用する食器や調度品、家臣への下賜品、他藩への贈答、そして朝廷や幕府への献上品へとランクごとに、さらに精巧さは上がっています。

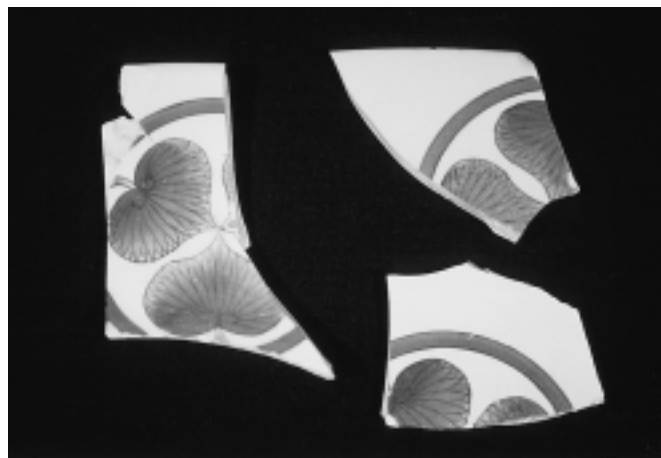
有田では、民窯でも赤絵に代表される柿右衛門のように高級品が造られましたが、三川内の民窯では日用雑器の生産に終始しました。藩窯の超高級品と民窯の低価な雑器生産という、2極構造は根本的に有田とは異なっています。



代官所跡出土 磁器 トクサ文皿



代官所跡出土 磁器 菊花文皿



代官所跡出土 磁器 三葉葵文大皿片

## 4 輸出と大量生産の時代

17世紀後半の民窯では、一時期海外への輸出品製造で沸きました。この時期は、中国が明から清へ政権が移る混乱期にあたり、海外への陶磁器の輸出が止まってしまいます。

そこで、東南アジアやヨーロッパ向けの陶磁器貿易品を扱っていた中国商人やオランダ東インド会社は、日本にそれらの製造を求めてきました。その窓口は有田であり、積み出した港から伊万里と呼ばれる所以となりました。また、それらが製造された時期から初期伊万里、古伊万里、伊万里と区分されますが、輸出の盛期は17世紀後半から18世紀中頃の古伊万里の時代です。

輸出品のなかで、特に低廉な焼き物として大ぶりな「雲龍文碗」があります。これは主に東南アジア向けの一般庶民が使う普及品ですが、有田では製造が追いつかず周辺の三川内、波佐見、嬉野そして遠く天草でも一斉に生産が始まります。

三川内では、木原山の地藏平窯、江永山では江永古窯、そして三川内皿山では長葉山窯、三川内東窯で焼かれます。この東南アジア向け輸出品は、有田主導において周辺諸窯が下請けとなった様相があります。有田でも造られていますが、ヨーロッパ向け輸出品や国内向け高級品は有田の独占品でありました。つまり利幅の大きい製品は有田で作り、利幅が小さい物は周辺へ下請けに出されたのです。

この有田主導の焼き物の流れは、やはり李三平などの朝鮮陶工により、肥前でいち早く磁器の生産に入ったことによる技術の熟度と、その販路開拓は他地域より先行し、窯業全体の成熟度は周辺窯業地域と比較すると格段に先進地であったことにあります。

その輸出景気も中国の政権が安定する元禄期（1690年前後）には、中国からの輸出が再開されたことから、生産は頭打ちになります。つまり有田からの斡旋による注文がなくなったのです。

そこで、三川内の諸窯では国内向けへの磁器の生産に転換せざるを得なくなります。17世紀の末から18世紀の初めに、先の「雲龍文碗」を焼いていた窯は、代わって「刷毛目」の碗と皿を焼き、その後はさらに低廉な粗磁の生産に入ります。これは波佐見で「くらわんか茶碗」と呼ばれる磁器の一種で、陶器の生地に白土で化粧をして見かけは白磁とした低コスト品で陶胎染付けと呼ばれます。さらには、コンニャク印判で模様を付けた「くらわんか茶碗」も造られるようになります。

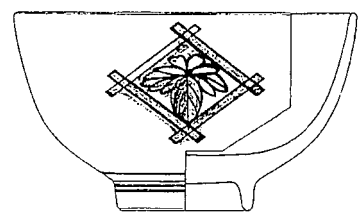
18世紀の三川内焼は、今度は波佐見の生産圏に取り込まれてしまうのです。御用窯では、精緻で独特な焼き物を造り、他の追従を許さない程の技術をもちながら、民窯においては有田や波佐見の周辺諸窯に甘んじたのです。



雲龍文碗



刷毛目茶碗



コンニャク印判碗

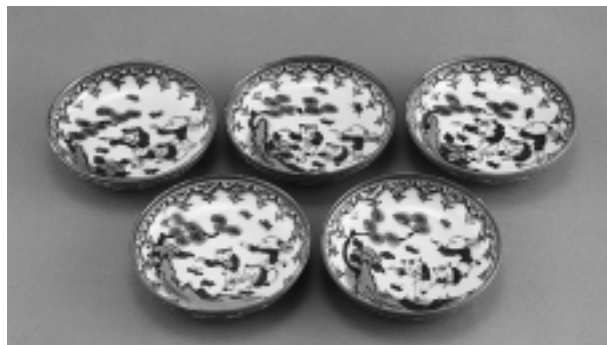
菊花文花瓶（御用窯）



5 長崎と三川内



献上唐子焼（御用窯）



献上唐子焼（民窯 広田窯）

19世紀になり、幕末期の三川内焼は、民窯においては関西向けの酒器が造られるようになります。これは、それまでの厚手のものとは異なり、薄手で生地も精選され、染付けも精巧となります。幕末期の京大阪は政局の中心地でもあったことに関係するのでしょうか。絵のなかには黒船が描かれたものもあって時代相を表しています。

御用窯の代表作品でもある唐子絵の碗や皿は、藩窯の後期に製造が始まりますが、民窯においても酒器などの高級品が造られるようになるなど、官と民の技術の差がなくなり、また藩窯の独占品であるべき唐子絵も民窯で焼かれるようになります。

また、「紅皿」も大量に造られました。これは、杯状の形状をなし、外周に「大坂新町お笹紅」のロゴが入っています。一種の商品名であり、大阪で最も繁栄した新町という遊郭街に店を構えていた「お笹紅」の商舗が紅の容器として注文したものです。

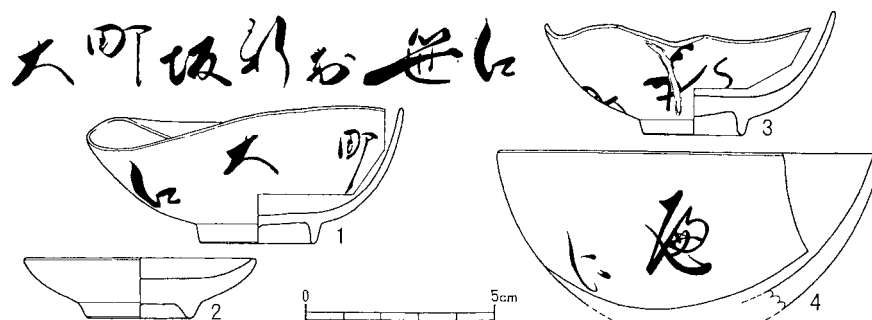
1804年（文化元年）に平戸藩は長崎に平戸焼物産会所を設置して輸出品の生産にも入ります。代々御用窯の棟梁を務めた今村家屋敷跡（伝代官所跡）の発掘では、幕末期の地層から上絵付けの前の白磁生地のコーヒー碗と皿が出土しました。上絵付けする直前の焼きで火割れとゆがみが生じたために廃棄されたものですが、御用窯では、この頃では海外向け輸出赤絵のコーヒー碗皿を造っていたこととなります。大英博物館のコレクションにも同一品があります。

恐らく、この時期は藩財政の逼迫もあり、利益が見込める輸出品の生産に御用窯は転換していた可能性が高いと思われます。

松浦家は、1871年（明治4年）に平戸焼物産会所の一切の業務を、古川運吉に譲り、官営から民営となり商舗名を満宝山枝栄となります。御用窯もこの時点で解体され、御細工人の一部は満宝山枝栄に残り、他は窯元となり、あるいは雇われて職人となりました。



高級酒器



紅 皿

## 6 明治から今日の三川内焼

満宝山枝栄は、明治7年には古川運吉から豊島政治に譲られ、製造と販売を行いました。間もなく解散します。窯跡は、三川内東窯の東の山林にあります。窯室は数室の小窯であり、付近にはコーヒー碗皿を焼いたときのハマが散乱しています。

コーヒー碗皿は、多くは赤絵です。17世紀後半の御用窯でも赤絵は一時期造られました。その後は幕末まで赤絵は造られていません。



赤絵コーヒー碗五客組物



山水絵花瓶

コーヒー碗皿は輸出品として満宝山以外でも「三川内今村造」などの銘で製造され、明治の前半期は多くの窯元で扱っていました。また、御用窯時代に造られた白磁、細工物、献上唐子、秋草文染付けの技術を継承する形として、御用窯時代の細工人が窯元になり、あるいは各窯元で雇われた元細工人の作品が造られるようになります。

豊島政治は、1899年（明治32年）に陶磁器意匠伝習所を三川内山に設立します。御用窯時代の技術の後継者養成の役割があったのです。また、今村豊寿は、平戸藩時代の御用絵師の田中南文を呼んで、中国南画を陶画に取り入れるよう、絵画塾を開いており、伝統と平行して新しい意匠を取り入れる努力も行われています。

また、近年の三川内焼は、多様なニーズに答えるものとして、日用雑器から高級品、割烹食器など多様化が進んでおり、さらに陶器、磁器も交えて造られています。一方では御用窯時代の伝統も正しく受け継がれています。



現代 割烹組物